

わからないこと

いくつかの問題に関心を持っているのですが、問題はそれぞれ異なっていて、問題の間に直接的には関係がないのですが、それらがお互いに関係がありそうな気がします。しかし、私には、それらの問題がどこでどのようにつながっているのかが分からないのです。そこで、わからないままに、それらの問題について書いてみます。それらの問題とは以下のことです。

1) 最近、大学の中でも、政治や行政の世界でも、何か改革のようなことをするのですが、結果として、前より状況が悪くなっているような気がするのです。私に関心があるのは、どうして悪くなるのかではなくて、なんでそんな無駄なこと（あるいは有害なこと）をするのかということです。例としては、東大の4ターム制と国際化、年金改革、地方分権化、仕分け、情報公開法などがあります。これらの評価は様々に意見が分かれますが、私見では、少なくともあまり意味があった変革には思えません、短期的には有害だったかもしれません。今になってみれば、何のためにそんなことをしなくてはならなかったのかわからないという感じがありませんか。それらがなぜそうなったかということも分析しなければならぬ大事なテーマですが、関心があるのは、何でそんなことをしたくなったのかということです。

2) 漁業に対する政策だけでなく、農業に対する政策も、しばしば、社会主義的です。日本の農水省もそうですが、諸外国を見ても、農業政策はしばしば社会主義的です。社会主義的な政策の良しあしは別として、どの国も、産業として農業や漁業をどのように育成するかという視点が見えにくいのです。どうしてそうなるのかと言うことです。

3) この文章は、フィリピンのア克蘭州のニューワシントンにあるサンパギータというホテルで書いています。ご存知の方もいると思いますが、フィリピンという国は、バラングイという、最小の行政単位での政策・行政は大変に民主的（この場合はデモクラチック・住民の意思が反映されやすい。）です。しかし、中央行政は、少人数の権力者に支配されていて、それらの「たらいまわし」と言うのが政治の実態だと思います。この二重構造がどうしてなのかということです。そこにデモクラシーというものの、危ない実態がありそうな気がするのです。

4) 最後に、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）に対する違和感です。私は、SNS というものがとても気持ち悪いのです。ネットで検索してみると、SNS の問題点とその解決に関する情報が沢山あります。これらが指摘しているのは、主に意図しない情報流失の問題です。私の違和感はそこではありません。SNS をやっている人間の気持ち悪さです。たまたま、比較的すいている通勤電車に乗りました。大学をさぼって、比較的早い時間に帰宅したのですが、私が座った座席の反対側に座った7人の乗客が、全員、携帯電話（スマートホンと言うべきですか）の画面を見つめて、何かを入力していたのです。左右を見渡すと横に並んでいる人々も携帯電話の画面を必死に見つめていました。不気味

な光景でした。この不気味さが伝わるでしょうか。私には、不気味です。その電車内の空間は、あきらかに現実空間です。その現実空間に存在する人が、私を除いて別の空間の存在する人とコミュニケーションしていて、彼らの意識はそちらの世界に存在するのです。今もその前の空間を明らかに遮断しています。目の前のリアル空間に存在しながら、意識は別の空間に存在する。その空間は、一昔前の言葉でいえば、クールな空間で、つつつとした無機質な空間です。目の前のざらざらしたホットな空間はあたかも存在しないかのようです。この様に説明すれば、私の感じた不気味さ・気持ちの悪さが伝わるでしょうか。

1から4が、何となく、底流でつながっているような気がします。4は最近の現象ですし、そのつつつとしたクールな空間に人々が支配されているために、ホット空間での問題意識が平然と無視されて、1のようなことになるような気がします。また、2も本質的には同じようなメカニズムが働いているような気がします。だとすれば、そのような現状は携帯電話と言う最近のテクノロジーによって、新たに生まれたのではなくて、人は本来そのような性質を持っているということだと思います。3は、リアルなホット空間におけるデモクラシーは、必ずしも、国家レベルでの政策・思想と言うようなクール空間とは別に存在するという事かもしれません。

というようなことを、漠然と考えています。つながりのない関係のない現象を、無理に頭の中でつなげようとしている、ノイローゼのようなものかもしれません。私はクールなつつつピカピカしたものが嫌いです。思想や正義もつつつピカピカしていて、私にとってはクールです。質感を伴うリアルワールドに現実の人は存在するはずで。そしてリアルワールドでの問題解決がなければHappyではないでしょう。自惚れかもしれませんが、至近距離に存在する人を説得したり理解させたりすることに、私は自信があります。数人の個性分かった学生に対する小人数講義ならば得意です。その限度は10人程度です。数十人を超える人間を納得させた、賛成させたりするのは苦手です。そのような合意は、抽象化されていて、質感を伴わないような気がするのです。質感を手掛かりに私は人を納得させているのかもしれません。国際的なリーダーシップとは、クール空間で人をどちらかに誘導していく能力だと思います。それはホットなリアルワールドの問題認識能力とは関係ないのかもしれません。このことは、グローバル、リーダーを育成しようという、最近の大学院のいくつかの教育プログラムが、本来内包している問題なのかもしれません。

もし、こういうことを論ずるのが得意な方がいらしたら、コメントの投稿をお願いします。

(20130713)